奥積雅彦（総務省統計研究研修所教官）

杉亨二「我新文明の曙光」のテキスト化の試み

１　はじめに

国立国会図書館ＨＰの電子展示会に「江戸時代における日蘭交流」を紹介するサイト[1]があり、同サイトにおいて「嘉永６年（1853）のペリー来航以後、西洋の学術・技術の導入は急務であった。幕府はそのために西欧に留学生を派遣する計画を立て、当初軍艦注文と留学生の派遣先にアメリカを考えていたが、南北戦争のために断られると、オランダに依頼を働きかけ、軍艦の発注と留学生派遣を交渉、決定している。」とされ、幕命よりオランダに留学したメンバーのなかに津田真道と西周がおり、彼らは、同国のライデン大学において法学、経済学、統計学を学びました。これについては、統計図書館コラム【人物編】№0003 において、彼らの帰国後の我が国における統計の発展を含めて紹介したところ。

我が国における統計の歴史を調べるとき、全体の流れを把握し、当時の時代背景を踏まえた上で、どうしてそのように展開したのかについて、客観的に理解することが重要であると思います。

「江戸時代における日蘭交流」については、前掲の国立国会図書館ＨＰの電子展示会のサイトに、江戸時代における日蘭交流から主なテーマを選び、それに関する同館所蔵資料を第２部で紹介している。ここではまず日蘭交流の全体像がつかめるよう、交流の歴史を概観されています。筆者は、これまで、日蘭交流の全体像のおおまかな流れについて、ザックリと理解することを目標にしてきたところ。日蘭交流について、もっと知りたくなりました。さりとて、何をどう調べるか方針が定まらないまま、深く考えずに、国立国会図書館デジタルコレクションで「日蘭」をキーワードに探索したところ、『日本と和蘭』に出会い、同書に杉亨二「我新文明の曙光」が所収されていることが分かりました。この著作は、既に著作権の保護期間満了とされ、これについて、公開する前提でテキスト化を試みました。①撮影した文字をテキスト化するアプリを試用するもうまくいかず、また、②ハードコピーをとった上、これをＰＤＦ化し、テキスト化して書き出すことを試行するもうまくいかずに断念。結局、デジタル時代に逆行して、アナログ的手法(手入力)に。ボリューム的には 4000 文字を超え、次項に掲げる杉亨二の自叙伝に関する図書を随時参照しながら、ダラダラと入力しました。テキスト化の成果物は、【別記】のとおりです。

	区分	閲覧方法
日蘭協会編輯部 編 『日本と和蘭』 大正３年(1914 年)	国立国会図書館デジタルコレクション	※ログインなしで閲覧可能(保護期間満了) https://dl.ndl.go.jp/pid/1918159 ⇒付録として、杉亨二「我新文明の曙光」が所収 https://dl.ndl.go.jp/pid/1918159/1/87

２　杉亨二の自叙伝の利用案内

	区分	閲覧方法
河合利安 編 『杉亨二自叙伝』 大正７年(1918 年)出版	総務省統計図書館蔵書	総務省統計図書館で閲覧可能 登録番号 WT7001894
	国立国会図書館デジタルコレクション	※ログインなしで閲覧可能(保護期間満了) https://dl.ndl.go.jp/pid/980787
（復刻版） 『杉亨二自叙傳』 平成 17 年(2005 年)出版	総務省統計図書館蔵書	総務省統計図書館で閲覧可能 登録番号 WT2100464
加地成雄 著『杉亨二伝』 昭和 35 年(1960 年)出版	総務省統計図書館蔵書	総務省統計図書館で閲覧可能 登録番号 WT7000023
	国立国会図書館デジタルコレクション	※国立国会図書館内/図書館・個人送信限定 https://dl.ndl.go.jp/pid/2975113

[1] https://www.ndl.go.jp/nichiran/index.html (国立国会図書館ＨＰ「江戸時代における日蘭交流」)

３　杉亨二の自叙伝に基づく年譜（幕末まで）

和暦	西暦	記事	「我新文明の曙光」の記事との対応	備考
文政 11	1828	長崎で生まれる		
天保 8	1837	両親と死別。祖父に引き取られ、長崎の上野舶来店に奉公する 同店には緒方洪庵、緒方摂蔵、手塚律蔵らも出入り。緒方摂蔵から「医範提綱」[2]を貸し出される	⇒記述あり 長崎生まれだったのでオランダと関わりのある生活環境	
弘化 2	1845	大村藩医の村田徹斎の書生となる	⇒記述あり	
嘉永 2 ～	1849 ～	大阪に出て、緒方洪庵の適塾に入る（3 か月ほどで、病気のため村田徹斎の書生に戻る） 江戸に出て手塚律蔵の塾に入る。その後、坪井信良、杉田成卿などの塾に入る 坪井に請われ村上英俊の助手として仏蘭西辞書の編纂に携わる 築地奥平邸で蘭学教授	⇒記述あり 二十二三の頃には蘭書の翻訳が大分出来る様に ⇒記述あり	
嘉永 6	1853	勝海舟の塾に入り、塾頭となる	⇒記述あり	ペリーが浦賀に来航
嘉永 7	1854			ペリー再来航、日米和親条約を結ぶ
安政 2	1855	幕府老中の阿部正弘に仕える	⇒記述あり	日露通商友好条約調印
安政 3	1856			米総領事ハリスが下田に着任
安政 7	1860	蕃書調所の教授手伝となる		
文久 2	1862			津田真道と西周、幕命によりオランダに留学しライデン大学で自然法、国際公法、国法学、経済学、統計学の五科目を学ぶ （慶応元年（1865 年）まで）
元治元 ～	1864 ～	幕府直参に登用され、開成所の教授となる 統計を志す	蘭書を読んだお陰で統計に興味を抱く	
慶応元 ～	1865 ～	津田真道[3]と西周、オランダから帰国後、統計学について杉亨二に講義	⇒記述あり	
明治元	1868	徳川家に従って駿河（静岡）に移住し、徳川家兵学校の教授方となる		

４　雑感

『杉亨二自叙伝』は、大正 7 年(1918 年)に出版され、その例言の冒頭において、大正 4 年(1915 年)に杉先生が米寿に達する祝宴において自叙伝の企画の決定がなされた旨が記されています。同書は、統計の黎明期における杉先生の功績や政府の取り組み等を知る上で。大変貴重な文献であり、後世に伝えていくことが我々、統計行政に携わる者の責務であると思います。また、今回紹介した「我新文明の曙光」が所収されている『日本と和蘭』は、大正 3 年(1914 年)に発行され、『杉亨二自叙伝』と併せて読むことで、江戸時代における日本とオランダの交流による我が国の統計の発展の過程の理解が深まるように思います。

---

[2]「医範提綱」の解題：人体の構造を研究するため、西洋の医書を数冊翻訳し要点をまとめて平易に説いたもの。解剖学・生理学・病理学などの知識が盛り込まれている。（人文学オープンデータ共同利用センター＞日本古典籍データセット＞書名一覧＞医範提綱による。）

[3] 津田真道は、オランダ留学において学んだフィッセリングの講義の訳書「表紀提綱一名政表学論」を明治 7 年(1874 年)に太政官政表課から刊行。

【別記】

我新文明の曙光(しょこう)　　法学博士　杉亨二

我國新文明の総ては、最初和蘭を通じて紹介せられたもので、其当時の記憶を呼起すだけでも容易な業ではない。殊に私は其和蘭文明の輸入港であった長崎に生れた人間だけに、幼時の事を回想すれば凡て和蘭に関したことばかりである。

先ず私は十歳ばかりで父母に死別れて孤児になったので、当時長崎で公儀の時計方をして居た上野俊之丞といふ、当時五十幾歳許の手先の器用な有名な癇癪(かんしゃく)持の人の許に居た。此人は其頃時計や、測量器械や、望遠鏡などを造っていた程であって、蘭人とは密接な関係を持った人であったので、緒方洪庵、同姓摂蔵、手塚健蔵[4]等いう人達が便宜のために上野の許に来てたのを覚えて居る。私が始めて「医範提綱」という生理の本を読んだのは摂蔵という人が面白いからと言って貸して呉れたお陰であった。大村藩の人で村田徹斎という医者も同様上野の許に来ていて、私はそれに伴れられて大村に行って薬局生をしていたこともある。其頃長崎で和蘭の医術を習って帰ると、どんな医者でも非常に患者が集ったもので、此の村田なども私を伴れて行って勉強させて呉れる筈であったが、非常な患者で迚も(とても)勉強など落着いてして居る様な余裕はなかった程であった。

で、蘭医ポンペ氏が幕府の懇請に応じて長崎に来て、公儀からは伝習人を送って、此に就て学ばせたのは後の事であったが、其以前に毎年和蘭商館付の蘭医があり、独逸医学に暁通していたケンプルという人もあり、後にシーボルトという外科医学に通じ、併せて木草の学に造詣の深い人が来ていて、伊藤圭介氏など此人に就て大分学ぶ処があったようである。尚氏に日本地図を渡した者があったなどという点から、氏は幕府から入國の禁を受けて帰國した。長崎の遊女との間に出来た氏の娘にお稲という私と同年位の女医があった筈である。

氏は後に開港と共に禁を解かれて東京に来て赤羽橋の辺に住んでいた。加藤弘之博士や自分などよく其宅に出掛けて色々な事を習っていた其頃確か氏の子息が公使館の書記官か何かを勤めていて、後に帰國する時に記念のメタルを贈って呉れた様に覚えて居る。

尚、日蘭文明の融合者として、吾々の忘れてならぬ恩人に号を秋帆と言って、書を能くした長崎の町年寄高島四郎太夫がある。当時長崎での非常な権官(きわやく)で、長崎会所の総裁を勤め、近大名達から扶持其他種々の贈物があって、唐人蘭人も争って高島に懇意を求めるという有様であった。随って(したがって)高島の貿易に関する新知識は可成行渡ったもので小銃(ゲベール)を初めて和蘭に注文したのも此人、蘭人が痘種を持って来るが赤道直下の酷暑を通って来て腐敗する故(せい)か、植えても皆な感染(つか)ぬ、幾度持って来ても皆駄目なため、蘭人側から子供に種痘をし、婦人を乳母にして持って来たいという提議があったが、当時外國人の渡来は禁ぜられていたので不許可となり、後に色々工風の結果待って来てその効を奏した、我國最初の種痘輸入などにも高島の尽力が与っていた。働手で斯程(これほど)に権威があったため、下役本庄平治といふ者が私恨混りに鳥居甲斐守(とりいかいのかみ)に焚きつけ、遂に後には謀反(むほん)という名義で缺所(けっしょ)になり、伝馬町の牢屋に憂き目を見ていたが、後に阿部伊勢守が老中となるに及んで、赦免となって阿部邸の近くに住んでいた。此人から当時の貿易の事、和蘭献上等の事を聞いて置けば好かったと今でも非常に遺憾に思う。

尚、私の十七八歳の頃であったと思う。「ヒヘランド」という医書が渡り翻訳せられて、世間では非常に珍重していた。私などそれを写本したものであった。私も長崎にいた時以来緒方を流転しながらも、蘭書だけは読めるようになりたいと心掛けていたので、二十二三の頃には大分出来る様になっていて、其頃仏蘭字書によって仏和対訳辞書を作っていた村上英俊の許に頼まれて行って、其辞書のＬから先は自分で書き、且つ村上の訳で間違った処など筆を入れてやったりした[5]。其頃での蘭学の大家は先ず杉田で、私も当時の珍書フランスのリセランド著の二冊物の生理書や、独逸のヒヘランド著「ヂリーミッテル」等を教わるために、此人の許に寄寓していた。此二書は当時にあっては非常に

---

[4] 原文ママ。杉亨二自叙伝では、「手塚律蔵」と表記。

[5] 一口メモ 前掲の「杉亨二自叙伝」では、仏蘭西辞書の編纂について言及されていましたが、本書から、仏蘭字書によって仏和対訳辞書を作成したとされており、辞書の作成プロセスに関する情報の手がかりを得ることがでました。同時に当時、翻訳に携わった、村上氏や杉氏の創造力に対する尊敬が深まりました。そして、彼らの思考回路と熱意を現代のＡＩに学習してもらいたいと勝手に思いました。

難解な書物で、杉田でなくては解し得ぬとされていたものである。私と同時に神田考平、佐久間修理なども質問を訊きによく出入りをしていた。杉田は学才に富んだ人で、蘭語、独逸語、露西亜語に暁通した博学多識な人で、医書、地理書等日本の文明に意味のある著述が多い。「砲術訓蒙」を著したも此人で、木村軍太郎は代名詞であった。其頃松前の人で下岡主殿という人も杉田の門下に入って来たが、砲術修業主眼の人で「タクチツキ」という兵書を自分に翻訳してくれと言われて読んで見たが、非常に難解な書物で容易に解らなかったのを覚えて居る。軈て(やがて)ペルリの来航となり上下騒擾(そうじょう)を極めた頃、同様杉田に来ていた奥平藩の富豪で築地小田原町を一町持っていた岡見彦蔵という人が、私を奥平に伴れて行って、一築地の中屋敷一藩の若い人達に蘭学の講義をさせたが、教科書はガランマチカやセーンタキスで、物理学等も教え、私には月に二圓の給料を呉れていた。

　するうちに当時赤坂田町にいた勝伯を訪う(とぶらう)て、あなたの許に書生が多い、学問はさして出来ぬが、人物は確かで書生位には何か教えられましょうが、雇ってやって呉れませんかというと、勝が其は好い、欲しいから世話をして呉れ、で名前はと筆を取って書こうとする、そこで自分は其男というのは私で・・・・・・とやると、勝が　明日からでも　というので勝の許に行って居た。

　勝の許で蘭学を教えた人には、ペルリが来た時、浦賀奉行を勤めていて、豪胆の聞こえのあった伊澤美作守と言って、当時大目付をしていた人の次男伊澤金吾という人などもあった。そう斯うしているうちに伝習人を公儀から差向けることになって、私も其人に選ばれていたのだが、閣老の阿部から私だけは残して置いて、自分の許に来るように計らえと勝に話があったので、自分も仕様事なしに阿部の家来になった。この人は新知識を尊敬した人気のあった閣老で私が始めて会ったのが丁度夏であったが、「今日は暑いに御苦労だ。此本の講釈を一つ承りたい、も少し側に来て講釈をして呉れ」と小さい机の上に独逸ゴツタ版のハンドアトラスという萬國の地理書を載せて出された。それを講釈すると阿部は「成程日本は小さいく(繰り返し記号)。」と感心して聞いていて、次にガランマチカという文法書を出されたので、十品詞の講釈をすると「成程それ位いであってこそ能く異國人にも読めるのだ」と非常に悟るところがあったらしかった。

　其頃私は伊澤金吾や、御目付の岩瀬修理などと一緒に、表向爪哇(ジャワ)行と、いう名義で攘夷(じょうい)黨(＝党)の前を誤魔化し、洋行する計画を立てゝ用意までしていたが、阿部閣老が病没されたので話は瓦解して了った(しまった)ことなどもある[6]。

　私が当時の加藤弘蔵今の加藤弘之博士等と共に開成所の教授職(儒者次席)になったのは其頃の事で、ロッテルダム、コーラントという週刊新聞を訳して閣老に差出していた、其頃始めて十冊物の萬國史が渡って、私は読むのに二年半もかゝった、仏蘭西革命の條(くだり)が如何に自分を動かしたかは他人の得て想像すべからざる処である。

　次に私が統計に興味を持ち且つ研究の資料を得たのも皆蘭書を読んだお陰で、和蘭の週刊新聞、ロッテルダム、コーラントの中に独逸のバイエルン王國の教育統計を見て、之は面白いものだと思ったのが最初で、其後確かクリミア戦争後即ち一八五六年頃と思う。毎年和蘭から数十部の書物が船来した中に一八六〇年と同六十一年両年の和蘭統計という書物があって、其に出産、死亡、婚姻、離縁、来往、放火、偽造等の諸犯罪人数等を表にしたのを見て愈々統計の必要なことを感じさせられ、後和蘭から帰った津田真道、西周の二人から和蘭に於ける統計のことを聞くに及んで、一層私の研究心は刺激せられた。其後明治七八年の頃赤松則良氏が欧羅巴から帰朝せられた時、ハウスホーヘル氏の統計学を土産に呉れられて、私は非常に愛読したものであった。不審な処はフルベッキ氏に就いて質していた。又エッチンゲン氏のモラール、スタチスチーク等も読んで、益々統計に興味を見出したもので後年甲斐の統計。駿河の統計、政府の政表などを自ら作るに至った動機は皆和蘭から得た統計知識の刺激に基づいたものであった。

　最後に我國の開港始末と和蘭の関係に就て記憶を述べて見ると、頃は天保飢饉後の事であったと思う。私の実見した処によると、和蘭から年々入航の貿易船でなく別段に軍艦を仕立てゝ日本に通信を求めて長崎に上陸した。其行列

---

6 一口メモ　杉が留学を希望していたが実現しなかったことは、前掲の「杉亨二自叙伝」でも言及されていましたが、本資料を目の当たりにして、改めて彼の熱い思いが伝わってきました。阿部閣老が健在であれば、彼の留学が実現し本邦の統計の夜明けはもっと加速されていたのではないかと想像しています(筆者の身勝手かつ無責任な想像です。)。

は真先に國旗を持ち、左右に太鼓を打ち、真中に士官か圖書[7]を捧げ、其又左右に付添って長崎奉行所に其圖書[8]を呈しに来た。其國書は和蘭でも余程評議を重ねたものらしく、有名なウイルレム一世王は当時既に隠居していたに拘らず、其席に加わって熟議したものであったそうだ。

　で此國書は鎖國を解いて世界貿易の港を開かれたら、貴國のために利益であろうという勧告であった。由来和蘭は三百年前より通商をしていて、日本には信用のある國故勧告をしたのであったが、其返事に貴國とは通商はするが通信はせぬという大した権識を並べて断ったものであったと聴いて居る。これなども和蘭と我文明とを結んで考える時、必ず忘れてならぬ事であると思う。

・旧字体は、特段の理由がある場合を除き、できるだけ新字体にしました。
・青字よる小文字の括弧書きは、筆者による補記です。
・青のマーカーは、筆者による強調です。
・現代では不適切な表現やあまり使わない表現と思われる箇所がありますが、原則として、原文を重視するため、そのまま掲載しています。

---

[7] 原文ママ。圖書の「圖」は「図」の旧字体(⇒次の脚注)。
[8] 原文ママ。圖書の「圖」は「図」の旧字体(直後に「其國書は和蘭でも余程評議を重ねたものらしく、･･･」とあり、「國書」の可能性が考えられます。)。